

頭中将と光源氏

——『源氏物語』「雨夜の品定め」の寓意性——

金 小 英

一、はじめに

『源氏物語』において人物論が可能になるのは、増田繁夫氏によると、濡標巻からだという。筋や事件中心の文脈が、この巻を境に作中人物の内面の方にも向けられるからであるが、濡標巻の大きな特徴といえは、光源氏の復帰と冷泉帝即位という、政治状況の変化である。それに伴い、作中人物の言動のあり方も「飛躍し、それまでの姿とはつながりにくいような傾向を見せる」といわれるほど、以前の巻とは違う人物像が語られるようになる。はやく清水好子氏は、『源氏物語』の人物造型が場面性・局面性に左右されることの多い点から、主題や筋の要請によって人物が変化し、筋に制約されることを指摘した³⁾。これを物語全体の本質としてとらえた森一郎氏は、『源氏物語』における人物造型は、ある人物の必然を追求していくのではなく、物語の構想・主題に「奉仕」せしめられる形になっていると論じた⁴⁾。これは「人物論の根幹を規定する優れた提言⁵⁾」として大方の賛同を得た見解であ

り、増田氏も、近代の小説とは異なった、「古代の物語としての源氏物語の作中人物のあり方を明確に指摘した」と評価した。

そうした作中人物のあり方の、もつとも顕著な一例としてよく取りあげられるのが頭中将である。須磨巻まで源氏の親友であったはずの人物が、絵合巻で一変し敵役にまわるとみなされてきたからであるが、しかし果たしてそのように「一変」と理解するのが妥当であろうか。問題は、頭中将が事実上はじめて登場する「雨夜の品定め」の読み方にあるのではないか。従来、物語内における「雨夜の品定め」の位置づけは、源氏を中の品へ導くための動機づけの機能を重視した影響限定説と、その女性論の影響が全編に及んでいるとみる総序説におおむね分かれて議論されてきた⁶⁾。しかし従来議論では、女に関する頭中将個人の意見を一般論として扱いがちであって、また源氏に関しても聞き役に終始しているといった理解に留まっており、「雨夜の品定め」のもつ寓意性は充分にとらえきれないと思われる。また、それゆえに濡標巻以降の頭中将と光源氏の対立関係、さらに頭中将の人物

像に大きくかわる糸口を見落としてきたのではないか。

本稿は、「雨夜の品定め」がすくなくとも藤裏葉巻まで三十三帖の世界を読み解くカギを内在している可能性があるとみる立場、もしくは『源氏物語』第一部の総序たりうるとする立場から、「雨夜の品定め」での頭中将と光源氏それぞれの、女性に関する発言・態度に注目することで、この「品定め」の寓意性を従来より踏み込んでとらえようとする。その際、特に「絵合」と照らし合わせた考察を展開することにもなる。というのは「雨夜の品定め」で、中の品の女論に織りこまれていた、源氏と頭中将の女をめぐる観点の違い、それに物事に対する姿勢の差が、遠く後の「絵合」で前面に浮上し表面化されると思われるからである。個人的あるいは私的ともいえる、二人の女性観・倫理観というべきものが後の政権争いにかかわり物質的な力、政治的な力へと変換すること、さらに娘の教育観にも及ぶところからは、物語構想における綿密な意図が読み取られると思われる。その過程で、かつて統一性に欠けていると評されてきた頭中将の人物像を検討しなおすことになるとともに、それに対比される源氏のありようをとらえなおすことにもなる。

二、「吉祥天女」をめぐる頭中将と源氏の〈笑ひ〉

「雨夜の品定め」は物忌みで宮中にこもっている源氏のところへ頭中将が訪ねる場面から始まる。そこに左馬頭、藤式部丞が加わり中の品をめぐる女性論へと展開するが、そこで源氏と頭中将の姿はかなり対比的である。以下に関連本文をあげる。

【関連本文A】（―は源氏に、…は頭中将に関わる文）

- ①「頭中将が（a）「女の、これはしもと難つくまじきはかたくなもあるかなと、やうやうなむ見たまへ知る。…（すばらしい女がいると聞き）まことかとも見もてゆくに、見劣りせぬやうはなくなむあるべき」とうめきたる気色も恥づかしげなれば、（源氏は）（b）いとなべてはあらねど、…うちほほ笑みて、「その片かどもなき人はあらむや」とのたまへば、」（c）中の品になむ、人の心々おのがじし立でたるおもむきも見て、分かるべきことかたがた多かるべき。…」とて、いとくまなげなる気色なるも、ゆかしくて、（源氏は）「その品々やいかに。いづれを三つの品におきてか分くべき。…」と問ひたまふ…（頭中将が）「…（d）なまなまの上達部よりも、非参議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざしいやしからぬ、やすらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬことなど、はた、なかめるままに、省がずまばゆきまでもてかしづけるむすめなどの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし。宮仕に出で立ちて、思ひがけぬ幸ひとり出づる例ども多かりかし」など言へば、（源氏は）（e）「すべてにぎははしきによるべきななり」とて、笑ひたまふを、（f）「別人の言はむやうに心得ず仰せらる」と中将憎む。（帚木 五六一六〇）
- ②「左馬頭が「…すぐれて瑕なき方の選びにこそ及ばざらめ、さる方にて棄てがたきものをは」…いでや、（g）上の品と思ふにだにかたげなる世を、と（源氏の）君は思すべし。（h）

白き御衣どものなよやかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて添ひ臥したまへる御灯影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。(i)この御ためには上が上を選び出でて、なほあくまじく見えたまふ。

(帚木 六一)

③馬頭、物定め博士になりて、ひひらきゐたり。(j)中将は「このことわり聞きはてむと、心入れてあへしらひゐるたまへり。」馬頭が若いころの自分の体験談を話そうとする。近くゐる寄れば、(k)君も目覚ましたまふ。(l)中将、いみじく信じて、頬杖をつきて向かひゐるたまへり。法の師の、世のことわり説き聞かせむ所の心地するも、かつはをかしけれど、かかるついででは、おのおの睦言もえ忍びとどめずなむありける。(帚木 六九―七二)

④(左馬頭の指食い女と浮気な女の話聞いて)(m)中将、例のうなづく。(n)君、すこしかた笑みて、さることと思すべかめり。「いづ方につけても、人わろくはしたなかりけるみ物語かな」とて、うち笑ひおはさうず。(帚木 八〇―八二)

⑤(頭中将が)「…(o)このさまさまのよきかぎりをとり具し、難ずべきくさはひませぬ人は、いづこにはあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば、法気づき靈しからむこそ、また、わびしかりぬべけれ」とて、(p)みな笑ひぬ。(帚木 八四)

⑥(左馬頭が女性論をまとめあげると)君は人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。(q)これに、足らず、また、さし過ぎたることなくものしたまひけるかなとありがたきに

も、いとど胸ふたがる。(帚木 九〇―九二)

これらを見ると、二人の間にはある判断をする際の物事との距離のとり方、さらにはあるべき女像をめぐる観点の違いというべきものが察せられる。

まず、距離感覚の面からは、本文①で、自分の経験に基づき完璧な女はいないと確信する頭中将の態度(a)に対し、源氏は必ずしもそれに賛同するわけでもないが余裕を持った笑みを浮かべながら(b)、判断を留保した形で頭中将に向き合う。頭中将の、確信に満ちた「いとくまなげなる気色」は中の品の女礼賛論(c)(d)でもかなり力を入れた形で主張されるが、源氏が笑いながら軽く突つ込む(e)と「憎む」(f)、その姿は力を入れた分、切れやすい面をみせる。隠さず感情をむき出しにする率直さは相手にその裏を取られる弱点にもなる。

また、本文③④のところ、左馬頭の話に夢中になり「いみじく信じて、頬杖をついていたたり、「うなづ」きながらひどく感じている(j)(l)(m)、その頭中将のありさまは、源氏が本文②でゆつたりと「添ひ臥し」たり居眠りをしたり(h)(k)、本文①と同じく「すこしかた笑みて」突つ込みをいれつつみなと笑う様子(n)とは対照的である。ひどく熱申した様子を人にみせたりしない、源氏の最高の貴族の姿に語り手は本文②で「上が上」の女を選び出しても満足ということはありそうもない(i)と賛美する。一方、頭中将については、物思いに沈んだ人物の悲しさを視覚的にあらわす際に用いられることの多い「頬杖」(r)が、(s)では話に興味津々な態度として示され、「女

の話には不似合いな仏法聴聞」(新全集)に見立てて、「をかし」さと呼び起こす。

以上から察すると、自分の考えを未熟な形のままで表さず、ほほ笑みながら頭中将より話を聞きだす源氏の態度からは、状況に対する感情統制能力の高さが看取される一方、知りつくしたように語りながらささやかな突っ込みにすぐ感情を露出する頭中将のようすからは適切な判断を要する際の、状況を見極めるパランス感覚を見失いやすい人柄が浮かび上がってこよう。

理想の女、あるべき女像をめぐる観点の違いも二人の関係のこちらより具体性を帯びて浮き彫りになる。本文①⑤⑥に注目したい。

本文①の(a)(c)(d)と本文⑤の(o)の頭中将の発言からは、「理想の女の不在」またはそうした女性を必要としないという見解がみられる。すばらしい女がいると噂を聞いて行ってみても非の打ち所のない人はいないと慨嘆しながらも(a)、それが何の欠点もない、完全無欠な女を求める願望につながることはなく、むしろ(o)では吉祥天女のような完璧な女を妻に望めばそれこそ仏くさく人間離れして興ざめた、と笑い落とすのである。頭中将にとって、あるべき女像は本文①の(c)(d)から推測できる。中の品の女を評価する文脈であるが、(c)ではそれぞれの気質やめいめいの考え、好みのはっきりした点に注目している。ほかと区別できる「おもむき」に美点をおいているわけで、諸注釈などが指摘するように「個性」ともいうべきものであろう。また(d)では、いい加減な上達部より非参議の四位などが、十

分な財力をもってまぶしいほど成長させた娘のなかに、けちのつけようもないくらい「おとしめがたく生ひ出づる」という女性も「あまた」いること、またそういう人が入内して帝の寵愛を受けることも多いと評価している。(c)と(d)を合わせて読むと、財力のある中流の家で教育された中の品の女性こそそれぞれの個性がはっきりしていて面白みがあるという、礼賛の文脈がみえてこよう。

しかし、これに反応する源氏からみれば話はまた違う。理想の女はいないのだと慨嘆する中将の言葉に、(b)の「いとなべてはあらねど」と思うところや、(g)の「上の品と思ふにだにかたげなる世を」と思う、その心中からは、めったにいそうもないけれども、理想的な女に会った経験が匂わされており、希求している心理をも漂わせている。事実、元服前に帝に許され才色兼備の妃たちの姿をみていた源氏の「ゆたかな眼力」ゆえの心中である。本文⑤の(p)「みなわらひぬ」も示唆的である。玉上氏は、

湖月抄本は「とて、みなわらひたまひぬ」である。四人のうち、地の文で敬語の「たまふ」がつくのは、源氏である。「わらひたまひぬ」とあれば、源氏も笑ったことになる。…したがって「とて、みなわらひぬ」だと、源氏は笑わなかったことになる。¹³⁾

と指摘し、広瀬唯二氏は、『湖月抄』の本文の問題から、本来あった「給ふ」が転写されていく段階で脱落したとは考えにくいとみて、この「みな笑ひぬ」が、微妙な敬語表現の操作により、みな笑っている中で光源氏一人だけは笑わなかったことを読者に伝え

る、とした。さらに源氏が笑わなかったのは、「吉祥天女」にも劣らぬ完璧な女性として慕われ続けてきた藤壺が、その心中に浮かんだからだと結論付けた。

『源氏物語大成』『源氏物語別本集成』などを確認したところ異同は特にみられない。つまり、『湖月抄』の「みなわらひたまひぬ」は源氏を意識した『湖月抄』独自の読みによる本文と考えられる。秋山虔氏のいうごとく、きめこまかくたどられている『源氏物語』の敬語行為が人間関係の劇的な躍動性の造形に参与せしめられているのであれば、ある敏感な読者の印象に源氏の笑い声はうかばなかっただろう。作者の精密な計算のもとで「たまふ」が用いられなかった理由は、広瀬氏の指摘どおり、藤壺を連想しているという源氏の心内を示唆するためであろうが、その根拠は左馬頭の女性論が終わる箇所（15）の本文⑥で、「完全な理想形の結像」として源氏の心中に藤壺が想起されるところにある。特に本文⑥は桐壺巻の次の一節とも連動（18）していると思われ、注意すべき一節である。

⑦藤壺の御ありさまをたくひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見ぬ、似る人なくもおほしけるかな（桐壺 四九）

間接的には源氏に藤壺を想起させたともいえるであろう吉祥天女は、豊麗な美貌の女神であり衆生に福德を与える天女として日本では奈良時代以降盛んに信仰された。図像にも描かれ男がその像に思いをかける話は周知のとおり『日本霊異記』（19）以下の説話集にみえる。仏典の中の神でもあるが、その一方で男の懸想の対象にもなっており、『源氏物語』以前に成立した『うつほ物語』の中

では、理想的な妻、求めるべき妻の比喩としても用いられている。事実、源氏にとっても藤壺は、本文⑦のように「たくひな」き最高の女性であり、藤壺のような人がいるならば「思ふやうならむ人」（桐壺 五〇）を妻に迎えたいと胸痛く思うほど、憧れの女性であった。それは必然的に「理想女性の地上化したもの」として藤壺のイメージを背負う紫君（20）の登場をうながすことにもなる。

通常、源氏と藤壺の禁忌の恋の原像は『伊勢物語』に求められる場合が多い。また古代説話の観点からは白鳥処女説話との関連性がよく取り上げられるが、本文⑤で源氏が笑わなかったことに注意した右の検討によれば、吉祥天女は、藤壺の存在を読み解く上での重要なキーワードになりうるのではないか。また拝むべき完璧な女、吉祥天女に恋した『日本霊異記』の話にも、発想の源泉という面から注意を払うべきであろう。『玉の小櫛』以下、現代注釈書にまで『日本霊異記』（また『日本説話集』も挙げられる場合がある）の逸話は注記されてきたものの、その相關関係については必ずしも明確には論じられてこなかった。

いくつかの接点は考えられる。たとえば、吉祥天女像に懸想した優婆塞が、勤めごとに「天女の如き容好き女を我に賜へ」と、理想の女性の身代わりを請うところは紫のゆかりとしての紫の君との類似関係がみてとれよう。また、天女と夢の中でちぎりをかわし恐れ多く思うその心情からは、以後修行者として吉祥天女を一生拝みつつも一夜だけ交わした縁から永遠の女性として仰ぎみることになるに違いないと察せられるが、源氏が藤壺との密会を現ではなく夢のように感じていたこと、またそれゆえに理想化さ

れるところに似通っている点があると思われる。さらに吉祥天女の属性が繁栄をもたらす女神であることに鑑みると、臣籍に降下された源氏が、その後絶対的な權威と權勢による榮華を謳歌できたのは「藤壺との秘密の共同關係が原点」⁽²¹⁾ になつているとらえられる面も、藤壺と吉祥天女像の照応と理解しうるだろう。

以上のように、「雨夜の品定め」の叙述から、二者の異なる女性觀、かつそれに投影されている理想の差をも読みとることができたのではないか。つまり、世俗的な繁榮と公的な承認を重視する頭中將の發言からは現実主義的な面が如実に示されたのに対して、吉祥天女のような理想の女・藤壺を求める源氏の姿勢には、完全なもの、理想的なものへと上昇しようとする人間精神の基本的な欲求が垣間みられると思われる。お互いの軽いひやかしとおかしみの中で露見された二人の異なる志向性は、遠く絵合巻の、遊戯の場で具体的かつ対立的に検証されることとなろう。

三、政治的な世界への変換

絵合巻は源氏が養女前齋宮を冷泉帝に入内させることから始まる。濔標巻ですでに娘（弘徽殿女御）を入内させていた権中納言（かつての頭中將）にとつて、前齋宮の入内は不安を抱かせる事態であった。それまでよき友であり、競争者であった二人の關係にひびが入るのもこの巻からである。したがって頭中將の人物描写も「変貌」といわれるほど二変し、「不統一な点さえ見える」⁽²²⁾ ようになる。関連本文を確認すると以下のとおりである。

【関連本文B】（―は源氏に、…は頭中將に関わる文）

⑧（絵の上手な齋宮の女御に冷泉帝が心を奪われつつあると）（ア）権中納言聞きたまひて、あくまでかどかどしくいまめきたまへる御心にて、我人に劣りなむやと思しはげみて、すぐれたる

上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵ともを、二なき紙ともに描き集めさせたまふ。…（その絵を面白がる帝が、齋宮の女御とも一緒に見ようとするが権中納言は）心やすくも取り出でたまはず、いといたく秘めて、この御方へ持て渡らせたまふを惜しみ領じたまへば、（源氏の）（イ）大臣聞きたまひて、「なほ権中納言の御心ばへの若々しさこそあらたまりがたかめれ」など笑ひたまふ。（絵合 三七六―三七七）

⑨こなたかなたとさまさまに多かり。（ウ）物語絵はこまやかなつかしさまざるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑあるかぎり、（エ）弘徽殿は、そのころ世にめづらしくをかしきかぎりを選り描かせたまへれば、うち見る目のいまめかしき華やかさは、いとこよなくまされり。（絵合 三七九）

⑩中宮も参らせたまへ：左右と方分かたせたまふ。…まづ、（オ）物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に（カ）宇津保の俊蔭を合はせて争ふ。「左方」「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなければ、（キ）かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたかく、神世のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」と言ふ。（ク）右は、かぐや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことな

れば、誰も知りがたし。…絵は…世の常のよそひなり。「(ケ)俊隆は…心さしもかなひて、つひに他の朝廷にもわが国にもありがたき才のほどを弘め、名を残しける古き心⁽¹⁾をいふに、絵のさまも唐土と日本とをとり並べて、おもしろきことどもなほ並びなし」と言ふ。…絵は…いまめかしうをかしげに、目も輝くまで見ゆ。右はそのことわりなし。

次に、(コ)伊勢物語に(サ)正三位を合はせて、また定めやらず。(シ)これも右はおもしろく⁽²⁾にぎははしく⁽³⁾内裏わたりよりうちはじめ近き世のありさまを描きたるは、をかしう見どころまさる。(左方の)平内侍、

(ス)「伊勢の海のかき心⁽⁴⁾をたどらずにふりにし跡と波や消つべき

(セ)世の常のあたごとのひきつくるひ飾れるにおされて、業平が名をや朽すべき」と争ひかねたり。右の典侍、

(ジ)雲のうへに思ひのほれる心⁽⁵⁾には千ひろの底もはるかにぞ見る。

「(タ)兵衛の大君の心高さはげに棄てがたけれど、在五中将の名をばえ朽さじ」とのたまはせて、宮、

(チ)見るめこそうらふりぬらめ年へにし伊勢をの海人の名をや沈めむ(絵合 三八〇〜三八二)

たしかに以前の好意的な語り口とは違い、源氏に負けまいとする「いどみ」心は、本文⑧の(ア)の「かどかどしくいまめきたまへる御心」のように否定的にとらえられ、源氏からも「御心ばへの若々しさ」「(イ)」と嘲笑される。鈴木日出男氏は、頭中将

の人物像の変化は「旧左大臣家の長男として、藤氏の権門の家系を維持する立場からの必然的な経過」⁽²⁴⁾であるとし、源氏対藤氏という政治的な理由によるものととらえた。これは頭中将の人物像を説く多くの論が最終的にたどりつく結論であった。たとえば、帚木巻の「宮腹の中將」といった表現からその予兆をみる論⁽²⁵⁾、また桐壺巻で源氏と政治的に対立する右大臣家の四の君を正妻にしたことや真木柱巻で「二条の大臣」と呼ばれることから、「旧右大臣家系のそれを継承したのであり、されば旧左大臣家系に立つ藤壺・光源氏方と、政治的対抗関係に立たざるをえなかつた」⁽²⁶⁾という、当時の権力関係の構造から変貌の必然性を説く論などがなされている。田坂憲二氏も、須磨巻以前と湊標巻以後とに分けて考えるのはもはや常識だという前提を確認した上で、頭中将の人物像に「変容」が要請される政治状況については、旧右大臣家の勢力を吸収し、その支援をうけたことに根本の原因があると分析した⁽²⁷⁾。このとらえ方は、縄野邦雄氏も支持している⁽²⁸⁾。

娘の入内・立后が権門の家系を維持・拡大する手段であって、次代への政権獲得の布石にもなる当時の現実から察すれば、源氏対藤氏という政治的図式から理解しようとするのはもつともであろう。しかしながら、二人の対立状況を生み出す、光源氏と頭中将それぞれのもつていた要因、かつ頭中将の性格上の否定的な面は、確認したとおりすでに「雨夜の品定め」の段階で示唆されていたのではないか。ただし、「雨夜の品定め」ではごく個人的で私的な領域を越えなかつたが、政権の維持・継承に関わる話にまで進んできた時点で、物質的・政治的な力を得るべきものはどち

らなのかという主導権の問題に大きく転換し、それによる視点の変化が起こったと思われる。

二人の、主導権をめぐる政権争いの媒介になるのは「物語絵」である。本文⑨と⑩で、源氏と権中納言はそれぞれが擁立する梅壺と弘徽殿の女御に絵を献上したが、それは二人のになう価値観、理想を反映する物的証拠であろう。言い換えると、生き方の問題、身の処し方の問題として、物語に於て対照をなしているのである。

源氏は、(ウ)のように「いにしへの物語、名高くゆゑある」『竹取物語』と『伊勢物語』を奉り、権中納言は、「そのころ世にめぐらしくをかしきかぎり」(エ)ということで、『うつほ物語』と『正三位』を献上した。これらは藤壺中宮の前で、左右に分けられその価値が競い合わされるが、女房たちの論評は源氏と権中納言を代弁するはずで、本文⑩の(キ)のところ、左方は濁世に身を置きながらがれず天上の世界に帰ったかぐや姫の、精神の高潔さ、古代への回帰(新全集)の理念に大きく共感している。これに対して右方は地上主義というべき「宮廷讃仰、王威礼賛の精神」から『うつほ物語』をもって反駁する(ク)(ケ)。かぐや姫の昇天した「雲居」は誰にもわかりがたい領域であるゆえいようもないとし、そのころの道德的社会的基準からかぐや姫の卑しい身分と后にならなかったことを欠点として挙げ、『うつほ物語』の俊蔭が「ありがたき才」を外国と日本の朝廷に知らせたのを高く評価する。この時、左右の両者が用いた言葉にかぐや姫の「思ひのほれる契り」と俊蔭の「古き心」がある。「古き心」

は青表紙他本に「ふかき心」という異文も多く、新全集は「ふかき」のほうが通じやすいとしたが、その「ふかき心」という本文を認めて次に競いあう各々の物語を見ると、その違いはより顕著であり、左方と右方それぞれの価値判断の一貫した姿勢がうかがえる。

総合の二番として出されたのは左方の『伊勢物語』に、右方の『正三位』である。左方は、本文⑩の(ス)のように『伊勢物語』の「ふかき心」を賞賛したが、右方は余り身分の高くない「兵衛の大君」が帝の寵愛を受け「正三位」に叙せられた、その「思ひのほれる心」(ソ)を褒めたたえた。すでに考察したように、本文①で、家の十分な財力をかけ個性豊かに成長した、中の品の女が帝の寵愛を受けることを評価した(セ)(ド)、頭中将のこゝとばと連動していることがわかる。そのとき、源氏は(エ)のように「すべてにぎははしきによるべき」なかと冷やかしたが、まさに頭中将が認める「正三位」は「おもしろくにぎははしき、内裏わたり」(シ)などを描いたものであって、「雨夜の品定め」のときと同様の価値観が響いている。後に帝の御前行われた絵合でも左方の古風な絵に対し、右方は「昔の跡に辱なくにぎははし」(絵合 三八六)きものであった。

一番と二番の物語を比べてみると、『伊勢物語』の「ふかき心」は、かぐや姫の「思ひのほれる」反世俗的な面と共鳴しながら、俊蔭物語の世俗的な「ふかき心」と対立し、また『正三位』の「思ひのほれる心」との質の違いを明らかにしている。「雨夜の品定め」でみえ隠れしていた二者の理想主義の位相差を支え方向づけ

ながら、必然化する文脈であり、その意味で二つの場面は符合する。「雨夜の品定め」で現れた世俗的な繁栄と公的な承認を重視した頭中将の主張は、内外の朝廷に認められた俊蔭と、帝の寵愛を受け、中流の女性としてはありえないほど高い地位に上りつめた兵衛の大君の生き方と交響しあいつつ、一方では、吉祥天女に託されていた、源氏の理想的なものに対する渴望、またかぐや姫の高潔な精神、落ちぶれても輝く業平の自由な心とは緊張しあっているのである。

ただ、右方の主張は当時の人情を反映していたためか、左方の論法は劣勢に陥り、この場面においてのみ一貫して「中宮」と呼ばれる藤壺の、「伊勢物語」の賞揚（マ）（チ）によりやつとすることで救われる。朝廷の権威を象徴する「中宮」という呼称は、先学の指摘どおり源氏側の政治的な立場を堅固にするためであるが、世々に仰ぎ見られるべき朝廷の志向する理想を示すためにも要請されたのであろう。

中宮と冷泉帝の前での、二回にわたる絵合は源氏の勝利に終わる。聖的・超越的主人公光源氏に対し、俗的・現実的世界を体現する、源氏の引き立て役を負わされた頭中将に所詮勝ち目はなかったかもしれない。ただ、それを認めさせる方法として、物語における同意ないし合意を得る手続きとしての絵合という遊戯を導入したのは意味深い。冷泉帝を中心とした新しい政権が立ちあがった時点で、それを存続させ堅固にするには、政権担当者の権威や執行力だけでなく、後々まで語られる新たな道徳や理想、価値観が構築される必要があっただろうが、そこには人々が進んで

悦服するほどの説得力がなくてはならなかっただろう。主導権の行方が重要なわけだが、高田祐彦氏の述べるごとく、後宮の覇権争いが絵合という形で展開される以上、勝利を得るためには高い水準の文化が保有される必要があったのである。高度な文化の力は、人々の感動を集め、それによっておのずと人心を掌握することになるからである。絵合における源氏の勝利は源氏側の道徳または理想といったものが、人々の同意を得て物質的に転換する瞬間であったわけである。

「雨夜の品定め」のもつ寓意性は、このように頭中将をめぐる人物論的な理解を壊すことなく、むしろ絵合巻での政治闘争を見越したかのように機能しているといえるのではないか。それは常夏巻での頭中将の発言にみえる、姫君の教育観を通して明確に示されるだろう。紙幅の関係上、詳しい検討はできないが、源氏に主導権をとられた後、常夏巻でますます対抗意識を燃やす頭中将の次の発言は、やはり「雨夜の品定め」の女性論と照応すると思われる。

①「…女は：(ツ)いとさかしく身固めて、不動の陀羅尼誦みて、印つくりてゐたらむも憎し。現の人にもあまりけ遠く、もの隔てがましきなど、**気高きやう**とても、人憎く心うつくしくはあらぬわざなり。(チ)太政大臣の后がねの姫君ならばしたまふなる教へは、よろづのことに通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たゞたどしくおほめくこともあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。げにさもあることなれど、人として、心にも、するわざにも、立ててなびく方

は方とあるものなれば、生ひ出でたまふさまあらむかし。こ

の君の人となり、宮仕に出だし立てたまはむ世の気色こそ、いとゆかしけれ」(常夏 二二九—二四〇)

昼寝をする娘雲居雁に女のあり方を戒める場面であり、「不動の陀羅尼」云々という(ツ)が、本文⑤に通じていることは鈴木一雄氏の論考⁽³⁵⁾や注釈書でも指摘されているが、明石の姫君に対する源氏のやり方を嘲弄する(テ)については、新全集は「源氏が偏執を嫌い調和と中庸を重んずることは、しばしば他にもみえたが、内大臣の個性尊重の主張を裏書きする記事は他に見当らない」といつている。だが、本文①のところでも頭中将の個性尊重という傾向はすでに確かめたとおりである。頭中将は、吉祥天女のような「気高き」女を「法気づき霊し」といつて女の魅力と見ていながったが、源氏にとって、女の「気高き」は賞賛される美点の一つであった。数多くの女性と付きあつてきた源氏は、身分が高かれ低かれそれぞれの女の美点を評価していたが、興味深いことに源氏の政治性を支える女性には一貫して「気高き」⁽³⁶⁾が認められる。これと対照的に、源氏によって難点とされた女三宮の「けだかう恥づかしげにはあらで」(柏木 二二五)といった性質は、内大臣の息子・柏木によつて肯定される。内大臣の趣向がそのままうけつがれていると推察されよう。

四、結びにかえて

— 「雨夜の品定め」の胚胎していたもの —

このように「雨夜の品定め」の女性論は、源氏と頭中将の関係

においても有効に働き、その寓意性は少なくとも第一部の長編的展開を読み解く上での重要な視座を提供する総序として機能していたと思われる。「雨夜の品定め」に語られた源氏の志向性が完全なものを求める人間精神の基本的な欲求を象徴するものであつたとするならば、頭中将のそれは当代に通じる現実主義を代表するものであつたといえよう。「総合」は、その位相の違いを「物語絵」をもつて具体的に検証し競い合わせることで、個人的あるいは私的な価値とすべきものを、物質的な力、政治的な力へと変換させ主導権の問題に大きく置き換えた。二人を親友として描きながらも、根本的な違いを女性論の行間にひそかに胚胎させ、物語の進行とともに膨らませ、総合巻の政治的な物語の中で前面に浮上させたのである。

また右のことと関わつて、頭中将の人物像についても、従来のように滯標巻以降(特に総合巻)において必然的に変貌していきとらえるのではなく、「雨夜の品定め」での頭中将のありように照応していると解しうることが確認できただろう。二節で検討したように、物事に対し余裕をもつてのめりこみすぎることにない源氏の柔軟さと優雅さは、物事と距離を置かずのめりこみややすい頭中将の氣質との対比の中で形成され、互いを照らし合わせる効果をなしていたが、そこでの語り手は頭中将に対して決して否定的というわけではなかった。しかし、未長く存続すべき権力をめぐめる話になると、その性格の否定的な面が強調されるようになったのだと思われる。一方、頭中将としばしば対照される形で、源氏の卓越性はより顕著なものとなつていくわけだが、源氏の場

合も、「雨夜の品定め」以降におけるある種の一貫性を認めることができないのではないだろうか。ことほどさように、「雨夜の品定め」における二人のあり方は重要であった。

* 『源氏物語』『日本霊異記』の引用本文は小学館の新編日本古典文学全集による。

- 注(1) 増田繁夫「源氏物語作中人物論」(『国文学 解釈と鑑賞』四四九、一九七二)。
- (2) 増田氏、注(1)前掲論。
- (3) 清水好子「物語作中人物論の動向について」(『国語通信』七八、一九六五)、同「源氏の女君」(塙書房、一九六七)。
- (4) 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との関連」(『源氏物語の方法』桜楓社、一九六九)。
- (5) 大朝雄二「藤壺」(『源氏物語講座3』有精堂、一九七二)。
- (6) 増田繁夫「源氏物語作中人物論の視覚」(『国文学』三六一五、一九九一)。
- (7) 本稿における呼称は便宜上頭中将に統一した。
- (8) 先行研究に関しては鈴木一雄「雨夜の品定め」論」(『十文字学園女子短期大学研究紀要』二五、一九九四)に詳しい。
- (9) 「雨夜の品定め」が三部構成説という第一部の「総序」といいうる面があると指摘した最近の論では、梅枝巻との表現レベルの照応関係を検討した、陣野英則「『源氏物語』『梅枝』巻の書、書物と手紙」(『源氏物語の言語表現 研究と資料』古代文学論叢第十八輯――武蔵野書院、二〇〇九)がある。
- (10) 玉上琢弥「源氏物語評釈 第一巻」(角川書店、一九六四)。
- (11) たとえば、葵の上の死に傷心して涙をこぼしそうになりながら「頬杖」をつく源氏の例(葵 五五)や、母六条御息所のそばで「頬杖をつきて」悲しくもの思いに沈んだ前斎宮の例(漂標 三二二)

があげられよう。

- (12) 清水好子「源氏の女君」(塙書房、一九六七)。
- (13) 玉上氏、注(10)前掲書。
- (14) 広瀬唯二「雨夜の品定め」における光源氏」(『武庫川国文』四七、一九九六)。
- (15) 秋山虔「源氏物語の敬語」(『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四)。
- (16) 玉上氏、注(10)前掲書。
- (17) 村井利彦「帯木三帖仮象論」(『源氏物語IV』有精堂、一九八二)。
- (18) 本文⑥の(q)と⑦の表現の照応については、森一郎氏の「帯木三帖の構成と方法」(『源氏物語の主題と方法』桜楓社、一九七九)、及び村井氏の前掲論文(注(17))などでも示唆されている。
- (19) 『日本霊異記』中巻第十三「愛欲を生じて吉祥天女の像に恋ひ、感応して奇しき表を示しし縁」。
- (20) 大朝氏、注(5)前掲論。
- (21) 鈴木日出男「天上の女藤壺」(『国文学』三八一一、一九九三)。
- (22) 松尾聡「頭中将」(『源氏物語講座3』有精堂、一九七二)。
- (23) 総合巻以前の頭中将は、源氏にも劣らないほどすばらしい様子が描かれており、源氏を引き立てるような場面でも頭中将をフォローする語り手の姿勢は保たれていた。女をめぐる恋の戯れの中でも、お互いに「いどみ」心を持ちながら、それが敵対心を高めるのではなく、むしろ二人の連帯感を強める方向に働いていた。
- (24) 鈴木日出男「内大臣(頭中将)論」(『講座源氏物語の世界5』有斐閣、一九八二)。
- (25) 渡辺実「頭中将」(『源氏物語講座2』勉誠社、一九九二)。
- (26) 野村精一「頭中将」(『源氏物語必携II』学燈社、一九八二)。
- (27) 田坂憲二「頭中将の後半生」(『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三)。
- (28) 縄野邦雄「若菜巻の太政大臣家について」(『源氏物語と平安文学』4 早稲田大学出版部、一九九五)。

- (29) 藤原克巳「古風なる人々」(『むらさき』一六、一九七九)。
 (30) 清水好子「源氏物語「総合」巻の考察」(『文学』岩波書店、一九六一)。
 (31) 兵衛府の官人の長女。玉上氏は「兵衛府は長官でも従四位相当、上達部ではない」(『源氏物語評釈 第四巻』角川書店、一九六五)とし、新全集は「中流貴族以上はありえない」と指摘した。ちなみに、『正三位』は女主人公が「当時女官としての高位であった正三位に陞叙された」(石川徹「物語文学の成立と展開」『講座日本文学』3 中古編I 三省堂、一九六八)物語であると推測されている。
 (32) 清水氏、注(30)前掲論に指摘がある。
 (33) 星山健「頭中将」(『古典文学作中人物事典』東京リヌスチック、二〇〇三)。
 (34) 高田祐彦「光源氏の復活」(『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三)。
 (35) 鈴木一雄氏、注(8)の前掲論。
 (36) 葵の上(帯木 九一・若紫 二二六)、藤壺(賢木 一一〇)、紫の上(若菜上 八九)、明石の君(明石 二六四)、秋好中宮(濔標 四四一)がそれぞれである。

新刊紹介

本間洋一著

『類聚句題抄全注釈』

『類聚句題抄』はまたの名を『類題古詩』という、平安後期成立の日本漢詩撰(編者未詳)である。この漢詩撰は醍醐天皇、村上天皇、大江以言、源為憲ら漢詩文全盛期

の一流詩人達の句題詩の対句部分を抄録し収めている。漢籍が重きを置かれた平安時代にあつて、このアンソロジーが当時の文学作品に少なからぬ影響を与えたことは容易に想像できよう。本間洋一氏著の『類聚句題抄全注釈』は平安時代後期の文学活動を把握するには絶好の一冊と言える。

本書は解説篇では句題詩の詠法、表現、不明句題の復元をも行っており、利便性は

極めて高い。注釈篇では全詩に丁寧な語釈と通釈を施し、巻末には作者略伝と注語索引を付している充実の書であり、漢詩を受容した和歌や物語を研究するとき、その典拠がわからない場合に大いに参考になる一冊が、この『類聚句題抄全注釈』である。
 (二〇一〇年一月 和泉書院 A5判 一〇二〇頁 税込二一〇〇〇円)〔金子英和〕